

「觀察」雜感

石川師範附屬幼稚園 作田 せつ

鯉が鯨を食ふ

鯉が鯨を喰ふことに何の不思議もない。鯨を喰ふ鯉に鯨を喰はせに行く事がどうして自然の觀察なのか。成程子供達は大いに喜ぶ、然し只それは、鯉が自分の投げた鯨を喰つたと云ふ喜びにしか過ぎない。若し是が鯉が尾からでも鯨を喰つたと云ふならばさてこそと云ふ不思議も子等は持つであらう、けれど鯉に鯨をやつて喜ぶ位の事であれば、何も態々先生がついて御丁寧にたくさんの鯨を求めて行く程の必要もない筈だ。三つ四つの頃から、鯉は確に鯨を喰つたと云ふ經驗も喜びも子等は味つてゐ、知つてゐるのである。幼兒は驚き且喜び而して問ふ、とはよく云ふ。しかし鯉が鯨を喰ふ限りに於ては何等の問も發しなく又先生も啓發してやるべきこともないのである。「一體何をか鯉の觀察と云ふ」久しい焦燥は續いた。

然るに明けて國民學校はその自然の觀察の行くべき方向を明示した。即ち

- 1、自然に親しませ、自然の中で遊ばせつゝ、自然に對する眼を開かせ、考察の初歩を指導する。
 - 2、植物の栽培、動物の飼育をさせ、生物愛育の念を養ふと共に、觀察處理の初歩を指導する。
 - 3、玩具の製作をさせ、工夫考察の態度を養ひ、技能の修練をする。
- 而してその1については

(1)に云ふ自然は、兒童の環境としての自然であつて、兒童の視野にうつる自然界、並びに、其處に於ける人の營みを廣く意味してゐる。この自然に親しませると云ふのは好んで接しさせることで、自然の中に生きてゐる喜びを味はせ、自然を愛好するに至らせることである。その爲には、兒童の本性に従つて自然の中で

遊ばせ、自然物を友として遊ばせることが肝要である。さうすると、自然の中に、美しさ、面白さ、偉大さ、儂りのないまこと、すぢみちを見出し、無限の妙趣と眞實さに觸れようとする氣持、態度の萌芽が養はれるであらう。是が自然に對する眼を開くと云ふ意味である。自然に對してかやうな眼を開かせ、更に自然の眞實の姿を推究するには、考察の仕方の指導、考察の能力の訓練が必要であることは云ふまでもない。

と解かれ、ゐるのである。讀んでみると成程と思ふ、よく分るやうにも思ふ、が、それではと考へて見ると分らなくなつてしまふ。自然のありのまゝの姿を素直につかまふとするには、あまりにも自然に無關心の自分である。鯉は鯨を喰ふときめて動かぬ不謙遜さなのである。

鯉は必ず鯨を喰ふか

そしてさる日、日頃尊敬する師に一喝された。「鯉はいつでも鯨を喰ふか」と。冷汗三斗。我等はもつと自然に謙虛で、れど。十一月も末つ方、思ひ出したやうに私は子供達をつれて鯉の池に出かけた。勿論鯨

を持つてゐる。木枯の吹 日である。

いくら手を叩いても鯉は出て来ない。時時大きいのが、仕方がないと云ふ風にのつそり出てくる。そして投げた餌も、「仕方がない喰ふてやらう」と云ふ鹽梅である。只僅に、生れたばかりの二種位の子鯉が小さい。黙切のまわりに乳を吸ふ、やうに寄つてくる。流石に子供は人間も鯉もかはりなし、微笑ましき池の面の子鯉風景である。

一體今日はどうしたわけであらう

子等曰く

「こゝな、さがない。きつと僕等の先に誰か来て、たくさん餌をやつてしまつた後なのであらう。それでお腹がふくれてゐるのに違ひない」

未分化時代に相應しい面白い想像である。

「そ、で、明朝、誰もこない中にも一と来る事にしやう」

盛上る子等の相談は一決。

翌朝子等は早くに集つた。公園はまだしんとしてゐる。鯉の池へ、鯉の池へ、昨日の謎が走る。

結果はやつぱり昨日の如しである。

「こんなこともある」、子等は不思議を知

つた。やがて又春、活潑に游泳して餌を求める鯉群を想像し、春の力に備へて冬の一時を泥中に静かに住まふ鯉への愛着を一層に深うしたのである。

疑問は期待を生み、期待は又更に疑問を孕んで、大自然の盡きざる妙趣を味はれるのであらう。鯉が餌を喰ふことは、鯉が餌を喰はざるの疑問によつて始めてその意義を有するのであるまいか。

龜は息する

國民學校に於ては生物の飼育栽培を強調し生物愛護の念を養ひ、観察、處理の初歩を指導すべしとしてゐる。しかし飼育するだけで子等は果して觀察するか、である。龜を飼育した。大きな硝子箱に入れてである。何のための飼育か、自分は又行きつまつた。

龜の脚が四本あることは云ふもおろか、龜甲が何枚あるかと云つたところで始まりぬこと、首を出したり引つこめたりこれも不思議の一つには違ひないがそれまでのこと。夏から十二月迄保育室の中にある龜だから子等も時々思ひ出したやうにのぞいてはゐるが、それも只のぞいてゐると云ふに

過ぎない。何かこの龜の生活の中に、生きる爲の姿があるべき筈なのに。龜は爬蟲類に屬すと暗記したこの頭では、そのありのまゝの姿が見出せなかつたのである。随つて子等にその觀察への方向を暗示も出来ずもがいた。

飼育栽培は生物愛育の念に培ふとは云ふが果して、この毎日のぞいて見てゐるだけでそこまでに愛情が養はれるものなのであらうか。

「龜は息してゐるか」

又嚴しき師の一言である。子等の観方は新しくなつた。眞剣になつた。水の中の龜の生き方に不思議が加つた。うっかり見てゐたアブクが見え出した。日に日に水面に浮び上る回數の少くなつた龜の様に疑問を持つた。

十二月も末、龜は殆ど水面に浮ばなくなつた。子等は案じた、息をしてみるだらうか。

アブクも出ない。子等は案じ出した。愛情とは是だ。可愛い、何となく好だ。これも愛情には違ひない。しかし眞の愛情は、この子等の眞剣な心配なのだ。龜の生活を熱視する事によつて生じたるこの愛情なのだ。

龜は藁に包まれて廣い池の隅に移された。やがて雪がきて、池の上にも數尺積つた。子等は時々龜の生存を案じて、見えもせぬ池のふちに佇んでゐるのを見た。

「早く雪がとければいい、」是は誰もが時々思出した事であらう。

かくて見えざる龜の觀察はつゞいた。

水溫もりてやがてのそ／＼這ひ出した龜を見た時の子等の満足また思ふべしである。子等は既にその時は初等科一年に進んでゐた。

驚きを失ふ

櫟の木からパタリと落ちた甲蟲をふく見た一人、眞剣な顔でこの甲蟲を見守つた。

「何と云ふ不思議だ。人間ならばとつづくに大怪我をしてゐるか、さもなれば死んでゐるところだに——。この大きな疑問がやがて甲蟲の圓みの研究となり、遂にあの鐵かぶどの圓角なものとしたといふ話をいつかよんだ。何と云ふ素破らしい驚きであらう。子等はやがて成長する。幼き頃に培はれる逞しい驚きは遂に科學日本を背負つて立つてくれねばならぬ。幼児だからこそ國民學校にも増して觀察の重要性があり、指導の

むづかしさがある。觀察の材料は身邊にころがつてゐると云はれるけれど捉まへることが出来ない、既に驚きを失つてゐる情ない自分である事ははがゆく思ふ。幼児教育だからとて氣休めの觀察に終つてはならぬ。木の葉が散つた。落葉はあらゆる意味に於て幼稚園の大切な教材であり遊具である。或者は落葉への愛着をしみ／＼感じて嘆息した、「偉なるかな落葉、このたくさんの落葉は一體どうなつて行くのであらう」と。

拾つて畫がくだけが觀察でない事を又思ふ。疑は自然に對して最も謙虚なる者にのみ起る。

飛行機は誰が作る

今や幼児教育は生ぬるき傳統にのみ動いてゐる時ではない。日本は今待つてゐる。驚く子等を、そして見つむる子等を。兵隊ごつこをしてゐるから時局的な子供なのではない。

幼稚園の姿はあくまでも穩かなのである。

「驚く心、」是は最もひそやかに育ち而も最も逞しき力なのである。「よし、今に見

ろ」と齒をくひしはつて研究してくれる子なのである。

ブーゲンビルの大戦果發表の日、私は地圖を擴げて子等と共に感激した。子等は力んだ。「僕も今に飛行機のになるよ、そして航空母艦をやつ／＼けてやるのだ」と。このこそ國の御柱になつてくれると勿體なかつた。が又すぐ思つた。「えらい。だけ、その飛行機は誰が作るのだ、而し最も優れた飛行機は誰が考へ出してくれるのだ。この子等ではないか」と。この力こそ、ひそ／＼として育まれぬ科學する心でなくて何であらう。

國民學校に於ける科學的教育の高揚せられてゐる今日、幼児教育のそれに於てあまりにも低迷してゐるのではないか、感がして、遂にこの一文を草してみた。再び云ふ、日本は今待つてゐる。驚く子等を、みつむる子等を、そしてごつ／＼持續ける子等を。タンホボのとぶ種子を見て落下傘を想像するのは子供である。ガソリンなくして飛ぶ飛行機もこの子等の中から生れるのだ。

氣休めの保育を、きつと反省せねばならぬ。保姆の責任は大きい。覆ひかぶさつた

やうなすさまじい責任を感じるのである。而もそれが、何事もないやうな静かなる一言によつて育てられて行く事を思ふ時、こ

後に續く子等へ

附屬幼稚園 志村貞子

昭和十六年十二月八日。

長くも米英に對する宣戰の大詔が爆發された。ハワイ眞珠灣空襲の大戦果がラジオを通じて刻々に報ぜられた。あの日、私は幼稚園のラジオの前で幼児達と共に、大詔を拜承し緒戦の大戦果に限りない感激を味はつたのである。その後早くも二ヶ年、三度同じ十二月八日を迎へその同じラジオの前に十一時五十九分の時報を合圖に幼児達と共に心からの祈念を捧げ決戦の大東亞戰爭第三年を迎へたのはつひ先達のことである。幼いながら日本の子供である。祈念につゞく君が代奏樂の間も身じろぎもせず咳もせず小さな頭を垂れて謹しみ祈る子供達であつた。私は十年、十五年の後にこの幼児達の雙肩にかゝる重い務を思ひ、心身共

うしてはおられぬとさへ思ふ。保姆は子等と共に驚き、子等と共に追ひ、そして子等と共に育たねばならぬ。

に健かに、立派に皇國の御楯を生ひ立つやうにとおはせ祈らずには居られなかつたのである。嘗て滿洲事變、支那事變と皇國を賭しての大きな歩みの時、天皇の御楯となれよとの母の、師の國民の祈りの中に、剛く直く生ひ立つて行つた若人達が、今この大東亞戰爭にその若き命を捧げてゐる。このことを思ふ時、昭和十九年の榮ある年を迎へた子供達に祈ることは只一つ、この親に、この兄に立派に續けといふことである。それにつけても、この親や兄達がその尊い血肉を捧げてゐるこの戦を、そしてまたその親や兄のこの祈りの心を如何に子供達に傳へようか。子供は子供なりに、この大戰爭を、この大人達の心を現實の中に活き活きと感じてゐるに違ひないのであるが、

私共は母とし師とし、國民の一人として、生けるしるしある大御代に生を享けたる喜びと、後に續く者を持たず散華せられた幾多英靈の心とを次の世代に傳へずにはゐられない心持である。折にふれて私共は子供達にこの大東亞戰爭を語りきかせる。戦を語る。これは頗る嚴肅なことである。戦は言葉でのみ語るべきではない。英靈の御寫眞に、また征途につく皇軍機の勇姿に船艦相銜帝國艦隊の威容に、また私共日常の行の中にこそ語るべきものであらう。故に言葉を以て語る時にはその一字にも勇士の血肉が盛られ、一句にも英靈の魂魄が籠る。次々に發表される戦果の報道、その簡潔なる字句の中に幾多の英靈がましますのだ。私共はそこに炸裂する砲彈をきき、「天皇陛下萬歲」の絶唱が胸をうつ。こゝに神々しくも行ぜられたる昭和聖代の神話をきくのである。この神話は私の口を通して修飾せらるべくあまりに生々しく尊い。ただ簡潔な字句にじむ英魂の前にひれ伏す氣持を語るのである。私がこの戰爭を子供達に語るに多く、報道をそのまゝ以てするの、話として首尾整ふべき餘裕がない事を